施設環境の変化に伴う
施設入所支援利用児・者の行動
及び支援者の負担感の変化

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻

博士課程１年　川中瑞帆

指導教員：岩永竜一郎

背景　－強度行動障害－

強度行動障害(Challenging Behavior：CB)とは直接的他害や間接的他害，自傷行為などが通常考えられない頻度と形式で出現し，家庭にあって通常の育て方をし，かなりの養育努力があっても著しい処遇困難が持続している状態であり，行動的に定義される群を指す.
(行動障害児(者)研究会, 1989)

他害

- 穴が開くほど壁を叩いてしまう
- 周囲の人にけがを負わせてしまうほど噛みついてしまう　…等

異食

- 食べ物ではない、石やプラスチック、便を等食べてしまう
- 洗剤や化粧水を飲んでしまう　…等

自傷

- 頭部が変形するほど頭を殴ってしまう
- 自分の目を突き失明してしまう

…等

大声・奇声

- 周囲の人が恐怖や不快感を感じるほど大声を出してしまう

…等

背景　－強度行動障害－

- 熊本県で実施されたCB児・者の実態調査において、回答対象者のうち知的障害を持つ者は約82%であった. (熊本県, 2016)

- CBを示す人たちの中で自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; ASD)の特性を持つ方は97.4%であった. (近藤, 2011)

- CBは本人が持つ特性と環境の相互作用により生じると考えられる. (Inoue, 2019)

- CBは人と環境との間の複雑な社会的相互作用の結果である. (Allen et al., 2013)

CBは医学的な診断とは異なるが重度の知的障害やASDの人々に多く、環境要因の影響を受けることが多い

背景　－行動障害と環境要因－

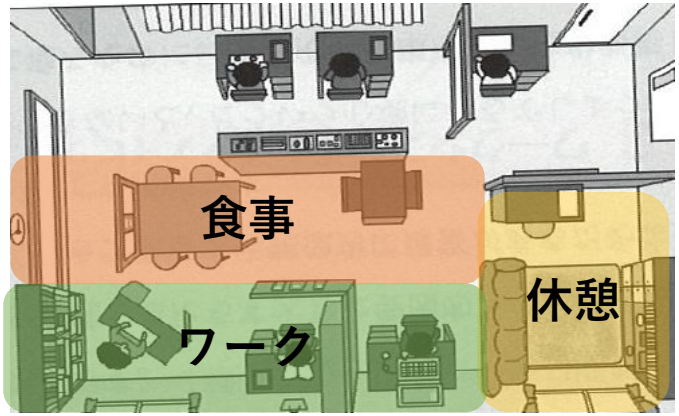
■CB児・者に対する構造化を利用した支援は、不適応行動の改善に効果がある.
(Javier et al.，2013)

構造化　(強度行動障害支援者養成研修テキスト，2020)

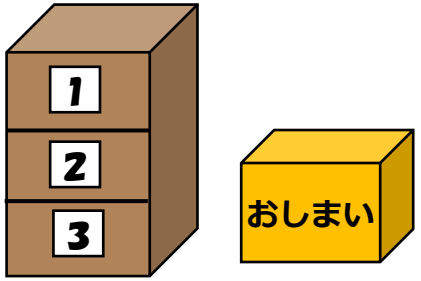
1．スケジュール

2．物理的構造化

活動ごとに場所を区別する
➡場所の意味を伝える
➡刺激を調節し居心地よくする



3.ワークシステム



4.視覚的構造化

背景　－行動障害と環境要因－

- CB児・者に対する構造化を利用した支援は、不適応行動の改善に効果がある. (Javier et al.，2013)

- CBを呈する知的障害者への薬物治療が実施されるか否かに、対象者が生活している施設等の形態が関与している. (S.R. Erickson et al.，2022)

- 入所施設において、施設職員の組織の目標の共有や離職率の低さ、十分な財源、物理的環境、前向きな組織的価値はCBの軽減に関与する可能性がある. (V.C. Olivier-Pijpers et al.，2022)

人的・物理的環境が行動障害に及ぼす影響は検討されつつある

背景 –施設形態の利用者への影響を比較した研究–

■知的障害者入所授産施設の個室化に伴い、自閉傾向のある入所者は自室の利用時間が増加した.
(吉弘ら，2010)

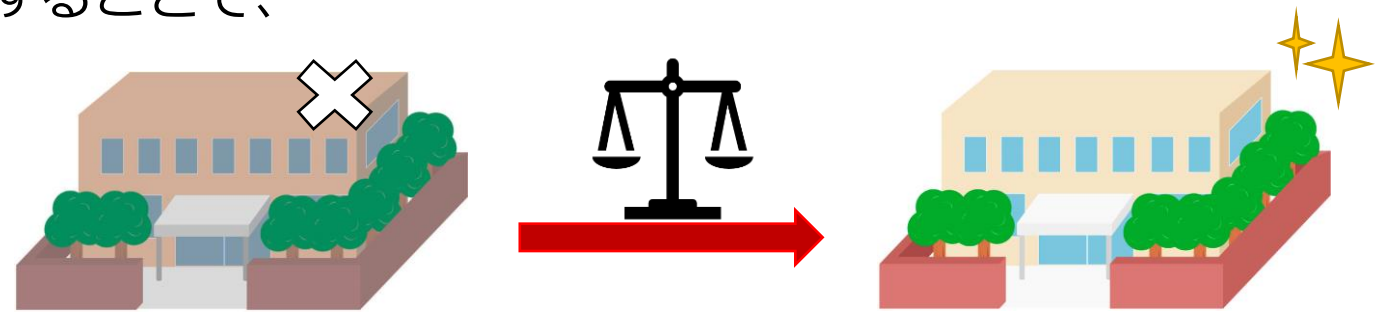
■従来型のものに比べ、非従来型の認知症患者の入所施設は入所者の作業遂行を促進させる.
(Kieva Richards et al.，2015)

■個別型かつ非入所型のレスパイト施設では、従来型・入所型の施設と比較し利用者の権利、感情的幸福、自己啓発、対人関係のQOLが高かった.
(Emma Nicholson et al.，2017)

- 施設の環境は利用者へ影響を及ぼす可能性があると考えられる
- 現段階で様々な検討がなされているが、CBを示す利用者の行動に着目して変化を追跡している研究は少ない

本研究の目的

建て替えを予定している普賢学園において、入所されているCBを示す利用者が、ASD及び知的障害の特性に配慮した新たな施設へ移行することで、



①利用者の行動がどのように変化をするのか

②支援職員の業務における負担感はどのように変化するのか

を明らかにし利用者と支援職員の両者にとってより良い施設環境を模索すること

今回は施設移行1か月後の変化についてご報告します。

方法　－対象者と調査－

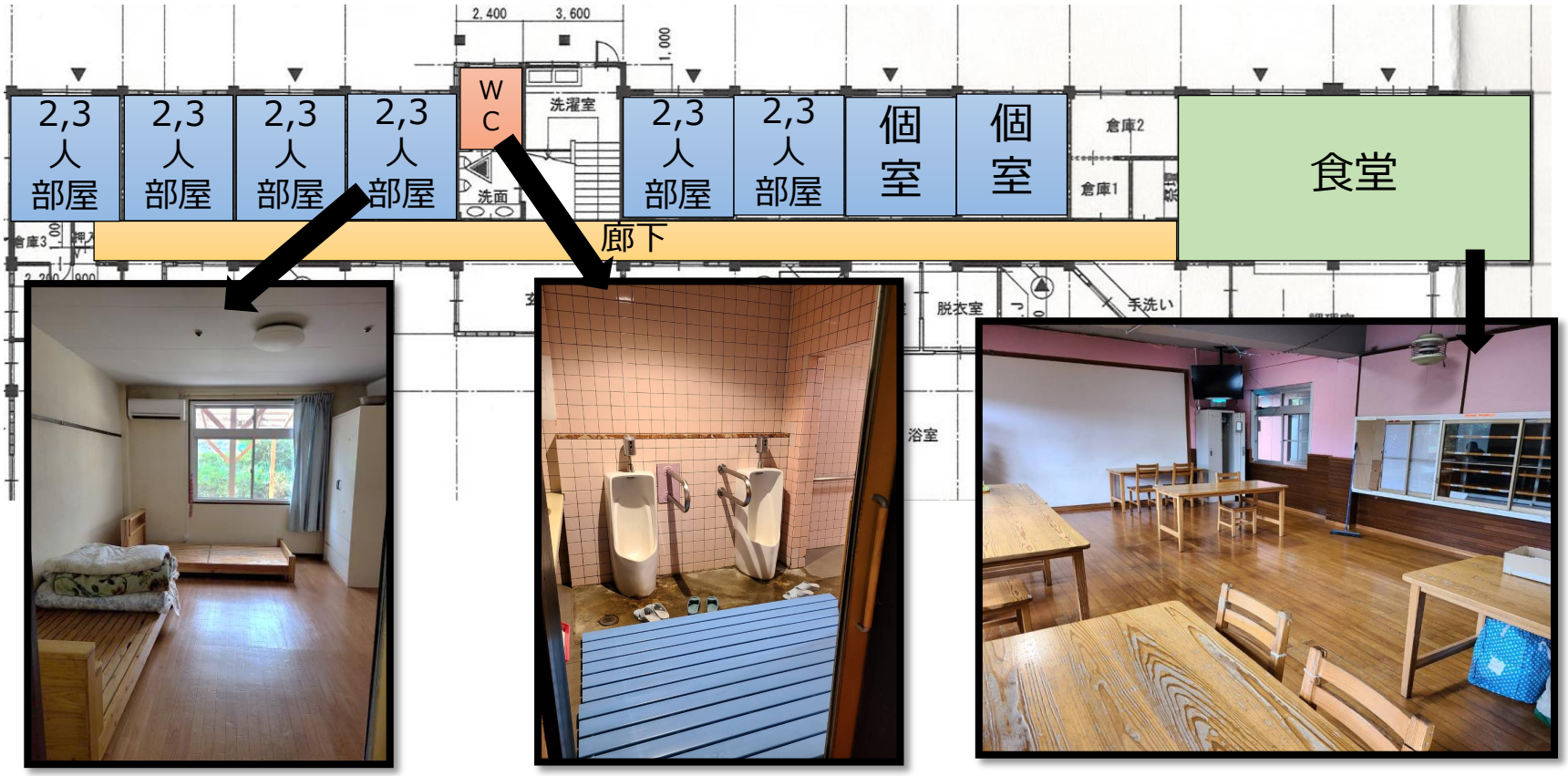
- 対象施設：社会福祉法人山陰会　普賢学園
- 施設の建て替え：旧施設(1970年建設)を取り壊し新施設を建設
- 対象者：利用者37名、支援職員34名
- 調査方法：利用者の行動面に関する質問紙と、支援職員の心理的負担に関する質問紙に無記名で回答いただく
- 回答者：支援職員
- 調査時点：引っ越し1か月前、1か月後、半年後、1年後の4時点

本研究は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学系倫理委員会の承認を得て実施している(承認番号：20121002)

方法　－施設の建て替え－

【旧施設】

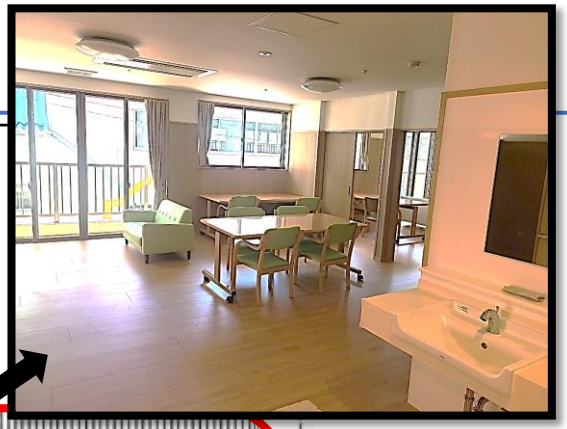
- 廊下に面して居室が一直線に並んでいる
- 居室は１～3人で利用されていた
- トイレは各階に2か所



方法　－施設の建て替え－

【新施設】

- １ユニット５名の利用者様が利用できるように編成
- １人の利用者が2部屋から成る個室を使用
- ２～３個室の間に一つトイレが作られている



方法　－施設の建て替え(居室)－

旧施設	
特徴	2人１部屋の居室
課題点	他利用者の動きによる刺激が統制できない 寝る場所と個人で余暇活動を行う場所が同じ

新施設	
特徴	寝室とリビングのある居室1つを使用
効果	場所と活動を1対1で結びつけた**物理的構造化**の要素が取り入れられている

CBの軽減に有効な可能性

方法　－施設の建て替え(トイレ)－

旧施設

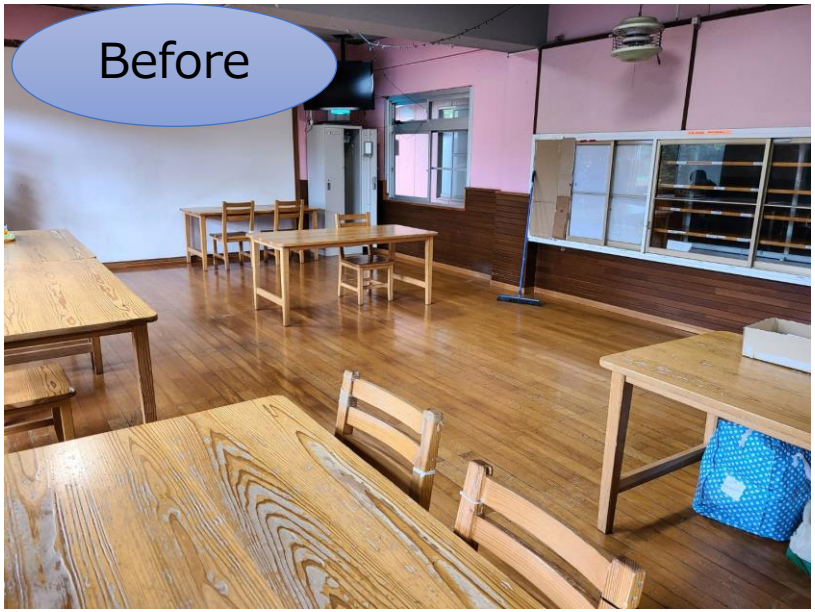
特徴	各階に2か所しかないため一度に多くの利用者が使用する
課題点	思い通りに使用できない 他利用者の動きによる刺激が統制できない

特徴	居 １ で利用可能
効果	**感覚刺激への過敏性に対する配慮**となる可能性がある

CBは感覚処理の困難さとの関連がある（C. Nieto et al.，2017）

CBの軽減に有効な可能性

方法　－施設の建て替え(食堂)－



旧施設

特徴	各階で利用者10数名が集まり食事をとっていた
課題点	他利用者の動きによる刺激が多かった可能性

新施設

特徴	同じユニットの利[illegible]事をとるようにな[illegible]
効果	トイレと同様に少人数での利用が可能となり**感覚刺激への過敏性や衝動的な行動に対する配慮**となる可能性

CBの軽減に有効な可能性

方法 –調査の流れ–

年月	女性利用者	男性利用者	支援職員
2020年12月	【事前調査】 • 調査対象となる利用者の選定(課題となる行動の頻度が週に1回以上) • 観察対象となる行動の決定(1~3つ/人)		
2021年2月	【プレ評価】		【プレ評価】
2021年3月	引っ越し		
2021年4月	【ポスト評価】		
2021年5月		【プレ評価】	
2021年6月		引っ越し	
2021年7月		【ポスト評価】	【ポスト評価】
2021年9月	【ポスト評価②】		
2021年12月		【ポスト評価②】	【ポスト評価②】

※支援者は男女両方の利用者様の支援を実施しているため、プレ評価を女性利用者の引っ越し前に、ポスト評価を男性利用者の引っ越し後に合わせて実施している。

方法　－調査用紙(プレ評価)－

○利用者に関する調査

利用者1名につき1部

1．基本情報

2．行動援護基準(厚生労働省)：行動障害全般の強さ、頻度を測定

3．BPI-S(J. Rojahn et al.)：自傷行為、他害行為、常同行動の強さを測定

4．行動観察シート：利用者毎に課題となる行動を決め頻度を測定

○支援職員に関する調査

支援職員1名につき1部

①基本情報

②MBI-HSS (C. Maslach et al,1981) : 燃え尽き症候群の程度を測定

③NAS(F.Katsuki et al,2005/香月ら,2007)：支援者の利用者に対する感情表出を測定

④自由記述：利用者及び支援者の変化について記載いただく

全て支援者が記入を行う

方法　ー調査用紙ー

観察対象とする
行動の定義

ID　19

行動観察シート

下記の行動が見られた時間帯に、行動が見られた場所を右のように記号で、行動の回数を正の字で記入して下さい。

1．他害行為：他の利用者様を叩く、つねる、突き飛ばす行為
2．大声・奇声：普段聞かれる発語もしくは発声とは明らかに異なる音量の声を出されている行動

記号　○：廊下　□：食堂　△：居室
●：その他　　－：行動なし
※●：その他をご記入の際は、行動が観察された場所を追記願います。

行動が見られた場所を
記録するための記号

1週間、8:00～17:00の
行動を観察して頂いた

行動が見られた場所
回数の記載欄

3月 8日			3月 9日			3月 10日			3月 11日			3月 12日			3月 13日			3月 14日		
時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声	時間帯	他害行為	大声奇声
8:00			8:00												8:00			8:00		
9:00	○T		9:00												9:00			9:00		
10:00			10:00			10:00			10:00			10:00			10:00			10:00		
11:00			11:00						:00			11:00			11:00			11:00		
12:00		○T	12:0						:00			12:00			12:00			12:00		
13:00									:00			13:00			13:00			13:00		
14:00			14:00			14:00			14:00			14:00			14:00			14:00		
15:00		●正	15:00			15:00			15:00			15:00			15:00			15:00		
16:00			16:00			16:00			16:00			16:00			16:00			16:00		

シートの記入結果をもとに、GASスケールの手法を用いて変化を調査した。

方法　ーGASスケールー

①以下の5件法の点数に当てはめて目標を設定する

点数	内容
＋２	予測される目標を大きく超えたレベルの達成
＋１	予測される目標を少し超えたレベルの達成
０	介入により達成すると考えられるレベルの達成
－１	予測される目標を少し達成できなかった(ベースライン)
－２	予測される目標を大きく達成できていない

②それぞれの目標に対し、重要度と困難度を評定する

重要度	3	とても改善したい	**困難度**	3	とても対応は難しい
	2	やや改善したい		2	やや対応が難しい
	1	少し改善したい		1	少し対応が難しい
	0	全く改善したくない		0	全く対応が難しくない

③計算公式に基づきTスコアを算出する

$$\text{Overall GAS} = 50 + \frac{10\Sigma(W_i X_i)}{\sqrt{\left(0.7\Sigma W_i^2 + 0.3(\Sigma W_i^2)\right)}}$$

W：重要度×困難度
X：－2～＋２で評定される粗点

利用者の結果

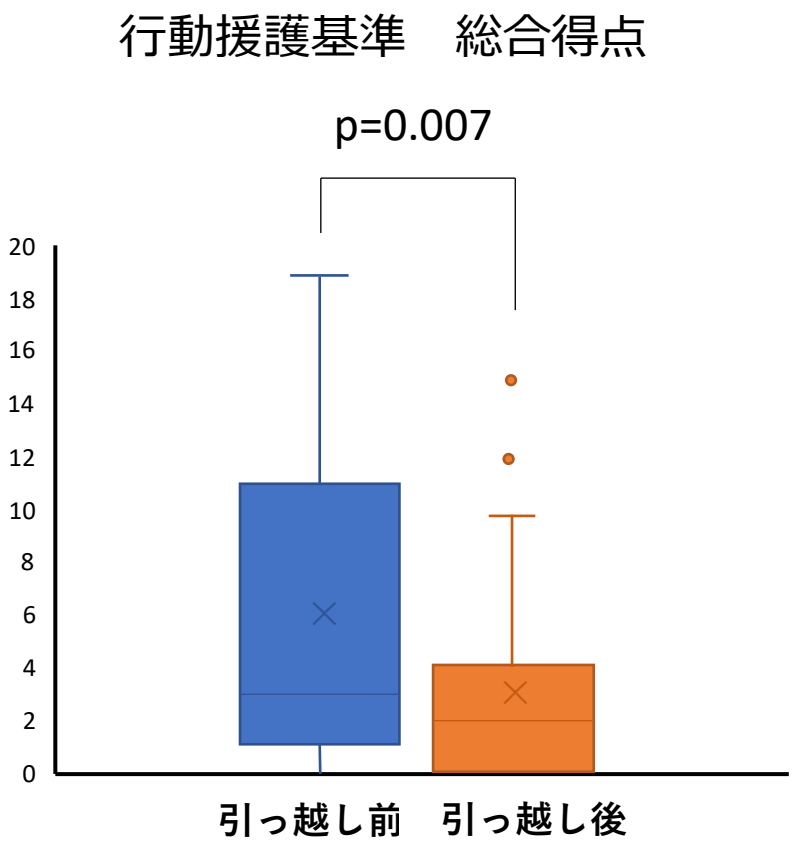
結果　ー基本情報ー

性別	男性	17(81.0)
	女性	4(19.0)
障害支援区分	6	13(61.9)
	5	5(23.8)
	4	3(14.3)
入所期間ヶ月	M±SD	132.3±147.9
強度行動障害	あり	14(66.7)
	なし	7(33.3)

自閉症	あり	11(52.4)
	なし	10(47.6)
知的障害	あり	21(100.0)
	なし	0(0.0)
てんかん	あり	2(9.5)
	なし	19(90.5)
ダウン症	あり	1(4.8)
	なし	20(95.2)

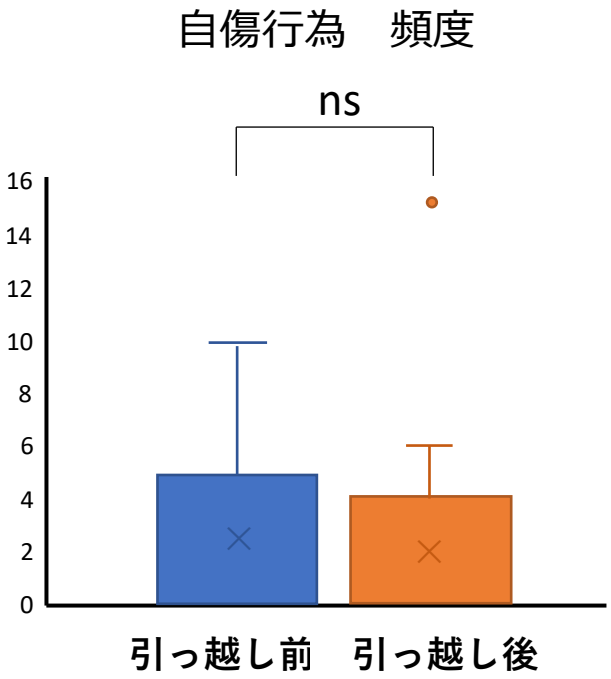
- ✓ 重度の知的障害をお持ちの方が多数
- ✓ 3分の2の方が強度行動障害の判定を受けている

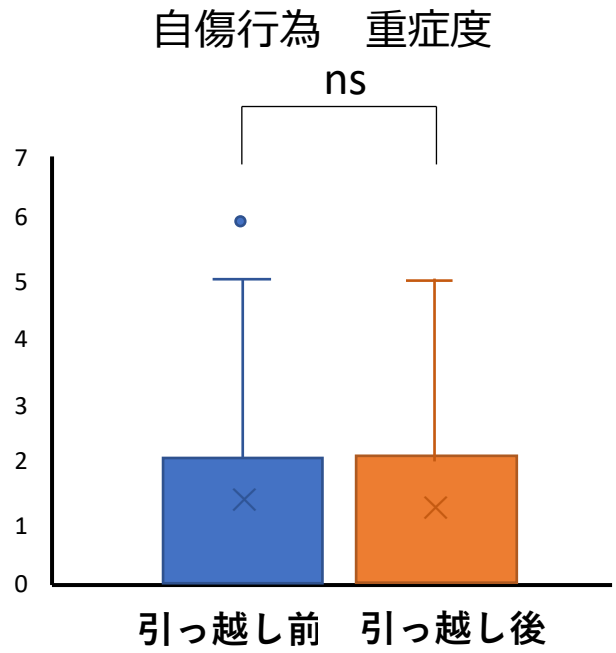
結果　ー行動援護基準ー



総合得点が統計学的に有意に減少している
➡総合的に見た行動障害の強度は減少している

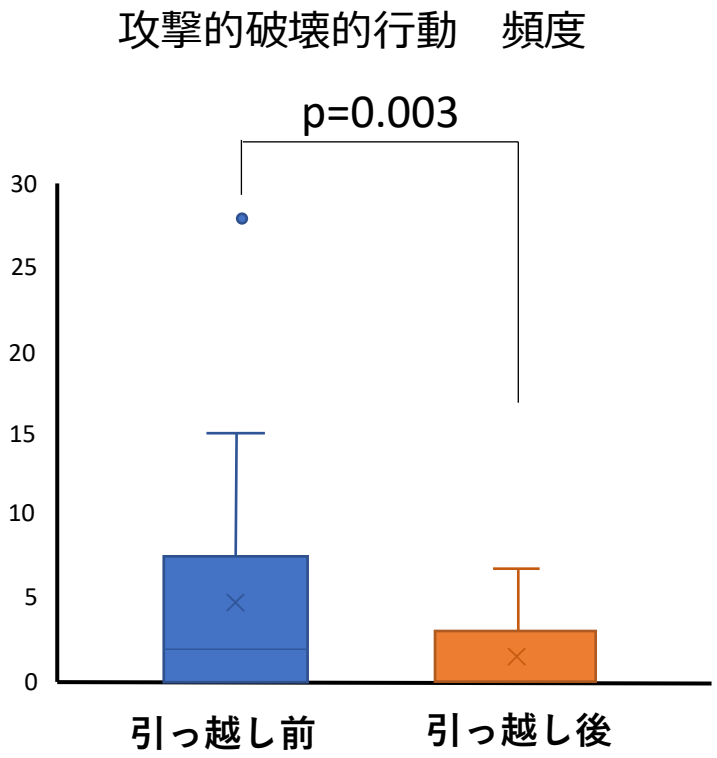
結果　ーBPI-S(自傷行為)ー

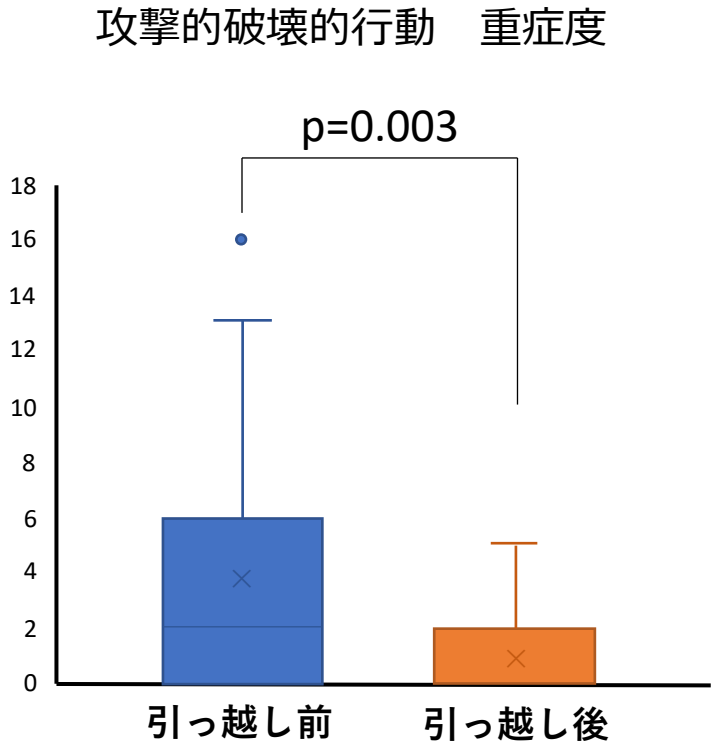




頻度、重症度ともに統計学的に有意な変化はみられていない

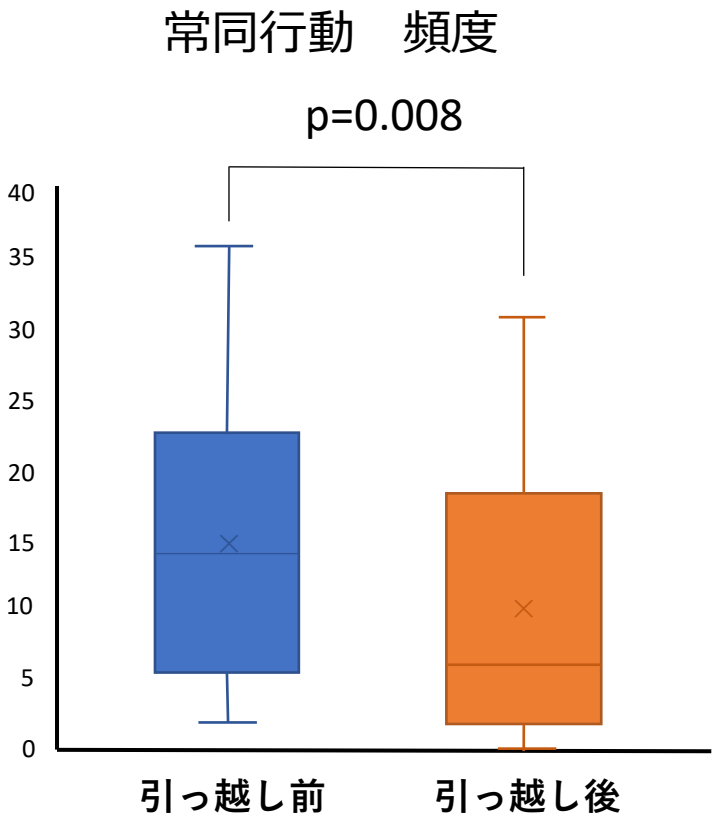
結果　ーBPI-S(攻撃的・破壊的行動)ー





頻度と重症度のどちらも統計学的に有意に減少している

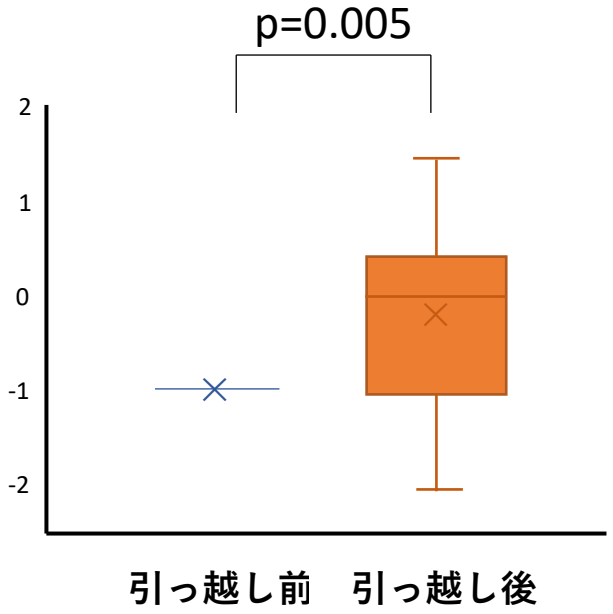
結果　ーBPI-S(常同行動)ー



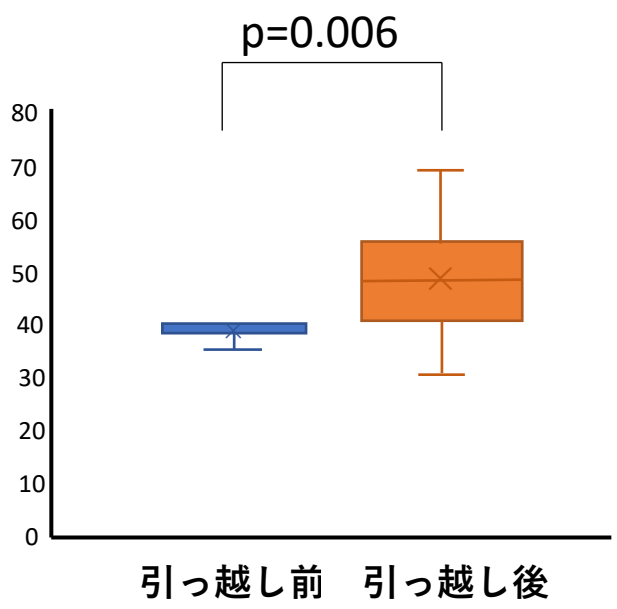
頻度が統計学的に有意に減少している

結果　ー行動観察シートー

GAS　粗点



GAS　Tスコア



目標達成の点数が統計学的に有意に増加した
➡課題となる行動が有意に減少した

支援者の結果

結果　ー基本情報ー

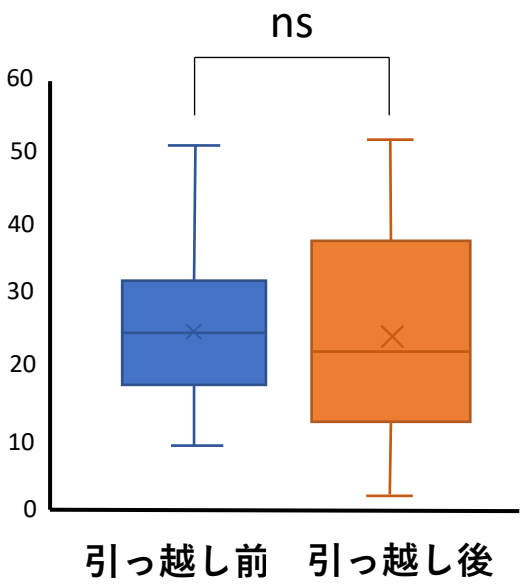
性別	男性	11(50.0)
	女性	11(50.0)
平均年齢	M±SD	45.9±10.9
障害児・者の支援経験年数(ヶ月)	M±SD	55.2±37.9
勤続年数(ヶ月)	M±SD	52.4±41.5
夜勤の有無	あり	12(54.5)
	なし	10(45.5)

雇用形態	総合職	11
	一般職	8
	パート	3
職種	支援員	20
	看護師	1
	相談支援員	1
強度の研修受講歴	あり	11(50.0)
	なし	11(50.0)

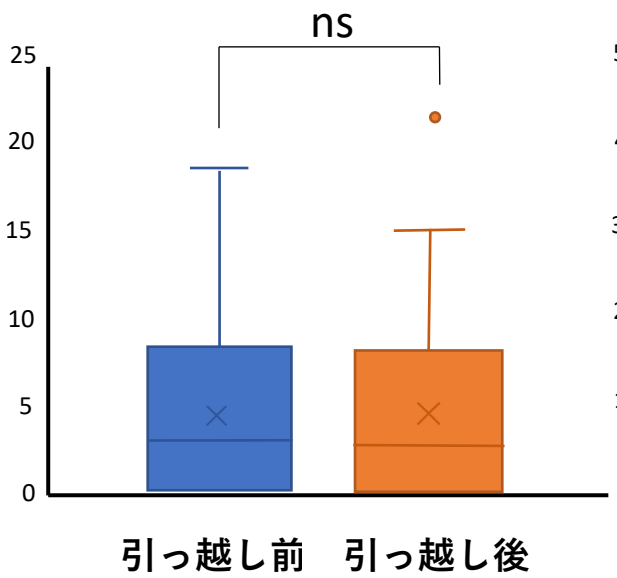
- ✓ ４～５年程度のキャリアの方々
- ✓ 総合職の方々を中心にお答えいただいている

結果　－MBI-HSS－

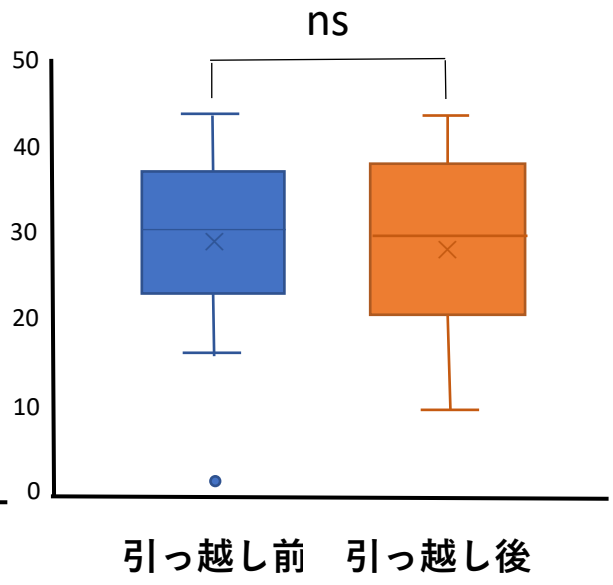
情緒的消耗感



脱人格化

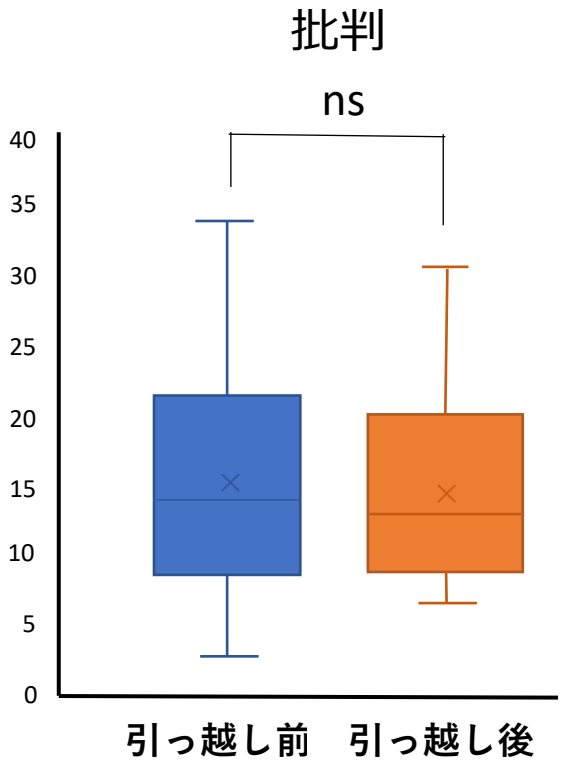


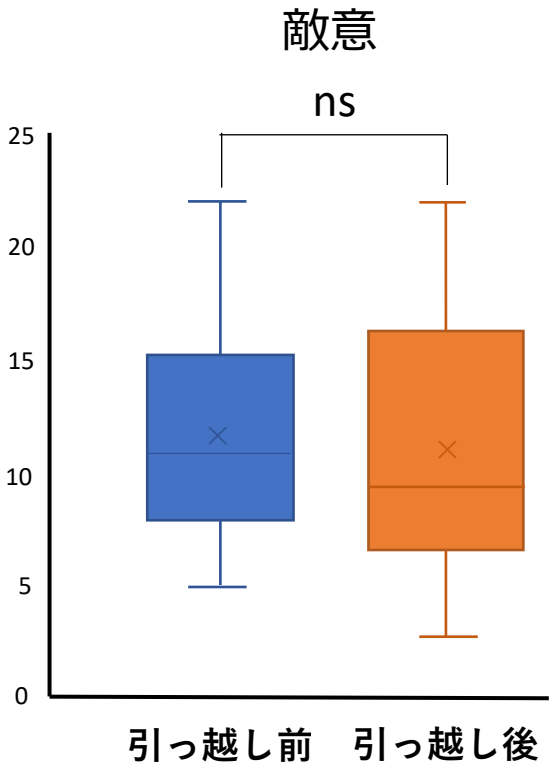
個人的達成感

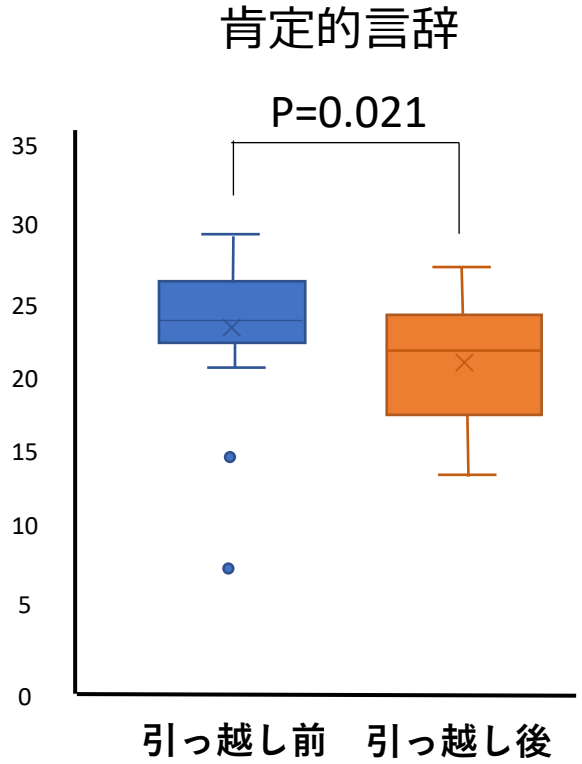


いずれの尺度の得点も有意差が見られなかった

結果　－NAS－







有意差が見られた尺度は肯定的言辞であるが、点数の変化をみると利用者に対する肯定的な感情が減少したと捉えられてしまう。

現時点での考察

✓ 利用者の行動に関して有意な変化が多くみられていた
→特に他害行為は改善したケースが多い
→ユニットごとに少人数化したことや物理的構造化により居室で過ごす時間が充実したことが要因として考えられる

✓ 今回の報告した結果は、施設を移行し1ヶ月経過時のものであり、新しい環境に移行した比較的初期のデータである
→今回観察された行動の変化は一時的なものである可能性がある
→今後の半年後、1年後の調査を実施し、長期的な行動の変化を追跡していく必要がある